

自分の考えや思いを英語で伝え合うことに喜びを感じる 児童生徒の育成をめざして（最終号）

越ヶ浜中の
英語の取組

今年度は「小中高連携英語教育推進校」の指定を受けていることもあり、ホームページ上では、地域や保護者の皆様だけでなく外部の教育関係者向けとしても取組内容を発信しています。

今年度最後の小中合同英語（小5・6及び中1）

卒業式も終わり、3年生が抜けた分寂しくなった校舎ですが、今日は小学5・6年生が中学校にやってきて、中学1年生と英語と一緒に学習しました。軽くウォーミングアップでゲームを楽しんだ後、それぞれの学年がこの日のために準備してきた発表を行いました。

まずは5年生が「自己紹介＋スリーヒントクイズ」を行いました。続く6年生の発表では、中学校の校長先生がインタビューとして参加し、「中学校でどんなことを楽しみたいか」などの英語の質問を6年生に尋ねました。6年生が堂々と質問に答える姿からは、この1年間の取組の成果が感じられ、とてもたのもしく見えました。

最後は、中学1年生が「中学校生活」についてのプレゼンを英語で行いました。ユーモアを交えながらのプレゼンは、さすが中学生といった内容で、これまでの学習で培ってきた相手意識の高さを感じました。



萩市の魅力をリーフレットにして、英語で発信！

2年生英語のUnit7「World Heritage Site」では、萩市にある世界遺産も含め、さまざまな萩市の魅力を英語で伝え合う学習を行ってきました。自分が発信したい萩市の魅力を、オリジナルリーフレットとして作り上げ、それを用いた紹介活動を今年度最後のパフォーマンステストとして行いました。

リーフレットは、3年生から引き継いだ本校の「ふるさと学習Instagram」などにも掲載していきたいと思いません。教室の中だけで完結する学びではなく、発達した通信手段を活用して、より「リアル」に実生活との結びつきを与えることで、生徒たちの活動意欲もアップしたと思います。



2年生でも訓練を重ねることにより、萩市の魅力をかなり英語で伝えることができるようになりました。伝えたい内容は必然的に難しくなってきますが、どのように言い換えることができるかを全体でシェアしながら一緒に考えていく活動場面は、生徒たちも生き生きと取り組んでいました。

英語を話せるようになるには、文法理解や言語材料の蓄積と同時に脳の瞬発力を鍛えていくことが欠かせません。「これはどう言うんだろう」「今の知識でどう伝えればよいだろう」と日頃から考える習慣をつけ、難しい内容だからと敬遠せず、頭を柔軟にして考えるようにするマインドをもつことの大切さを、生徒たちの成長から感じました。

終わりに

今年度1年間、本校は小中高連携英語教育推進校の指定を受け、さまざまな取組を行ってきました。

実際には、小学校への乗り入れ授業を開始した昨年度から少しずつ芽かかれていた種が芽を出し、つぼみとなり、ようやく小さな花びらが少しずつ開き始めたといったところでしょうか。

また、今年度は1年から3年まで、どの学年でも「ふるさとを伝える活動」に取り組んでできました。これにより、生徒たちの「ふるさと」に対する誇りや意識が高まったことも大きな財産でした。

私たちは海外に出たときに初めて、自分が日本人であるというアイデンティティーを強烈に痛感させられます。そんな場面に遭遇したとき、いつでも自信を持って自分自身やふるさとを語る生徒を育成するために、これからも教科における小中高連携を深めていきたいと思えます。

単元終了後の生徒のふり振り返りから

- ・とても楽しかったです。みんなと萩市のいいところについて会話することができ、萩市についてももっと発信したいと思いました。
- ・みんなの（発表）を聞きながら、気づかなかったことも知ることができ、自分も萩について見つめ直すことができ、もっと知る事ができました。
- ・楽しかったです。みんないろんな所を紹介していたし、同じ所でも伝え方が違っておもしろいと思いました。
- ・今回は萩市だったので範囲が広がったけれど、越ヶ浜だけにすると、もっと自分が知らなかったことが分かったと思いました。